

鈴木勝忠校

江戸座紙湯集

二

古典文庫

鈴木勝忠校

戸座湖沼集

二

古典文庫

古典文庫第二四一冊

昭和四十二年八月二十日印刷発行

(非売品)

編者 鈴木勝忠

二 発行者 吉田幸一

集諧俳座江戸

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所 東京都(王子局区内)
北区西ヶ原三ノ三四

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

江戸座俳諧集二

百千萬

福・禄・寿 三冊

百千万 福

沾洲試みに先百を数へて一塔をなす又百の韻して二塔形容くる三塔にをよへは山を買ふ錢とりあつめて羊腸の一空に扠めて建るしかあれと雲霧の侵す陰」もなしとかくして漸と聞伝へにとりあはせ是に賽くして翠微の間を日を経月をへてしのき出ぬ雲靄其間に漂ひ鴻雁その陰をよきつて渡る曾て万

「序一ウ

国の俳士は江都の相場を苦吟すれば万船の中一船にてを俳学の目当にせぬ事なし異象の順風誹風に和して次第に此湊に入る事必定ならむ我多年此事をしれば也」是則諸願成就の万錢塔ともよく見るへし

せむとく

「序二ウ

春之部 卯五月十六日開席

あふくへしよろつ父母花も江戸

ふところを出る春の色鳥

東風わたる羊も船の添荷にて

まだに砂糖敷人間てなし

国から柱へのほる糠ふくろ

国めつらしく六ツ六ツと起

金堀の裸吹せる松の月

取に露散る萩の長箸

ウ

来るごとに衣桁の翡翠匂はせて

日靈貴

ひるめのむちの笑ふわる口

別れ道この饅頭は腹あわせ

盆山披し四分度の一

文覚は俊乗坊の邪魔に成り

蓮 沾 古 雀 甘 陽 月 晋 壺 咫 風 蓮 沾
之 洲 井 洲 谷 風 下 如 月 尺 葉 之 洲

今ての醬油下野の花

斯て夜は昼の入物太夫もと

知らせて置て盗む伽羅哉

鏡より山も時雨て留守馴ず

先の卦躰を聞て嘲され

漢宮の跨き安きは内玄関

艸履もつかみ菜摘水汲

人參は見知らぬ葉分宵の月

鹿の声より鐘かしみ込

二
逗留の枕の伽は角力取

飯はいたゞくあの不孝ても

羽化しては屋根か手に入水馴棹

太靴はり替神ならは神

侍の大福帳とぬけにけり

風葉

咫尺

壺月

晋如

月下

陽風
上初ウ

甘谷

崔洲

古井

沾洲

蓮之

甘谷

咫尺

風葉

新よし原につるゝ長生

くり言は朱にも障らす浅黄腕

又主とりの二階四五日

鯨鞘はなめくらしつぬけ兼る

絵馬を貰ひかけて伊賀越

爰にかと訪へは薬盤絹節

半年も見て内儀といはむ

此月に縞着る程で笠はなぜ

あそひ通すに一葉驚く

ウ
瓢箪へ晏平仲は飛あがり

雨の暖簾のひつたりとつく

後朝の沙汰もない事苔譜代

あやかり黒子鏡見る鳥

我指に寐て怖されて鐘氷る

晋如

古井

甘谷

壺月

沾洲

月下

風葉

古井

崔洲

咫尺

陽風

晋如「上二ウ

壺月

沾洲

万金丹の息をふっかけ

通り町極暑の昼は宇津の山

つまみ洗ひは人の堪忍

瓦ふく矩に立たる鼻はしら

喰せはせぬが鎰は借す花

男色を知らすはわるういはつゝじ

うつかりと買ふ雛の傾城

春風の初月なれや車海老

能はうちやるが摩訶止観にも

三

しかし又革足袋の緒は不調法

財布をひろふ所大でけ

仕目へは鎗持ばかり捨小舟

要は髻なれと名はたつ

北堂を垣の生干に慰ませ

蓮之

甘谷

風葉

月下

咫尺

蓮之

古井

陽風

甘谷

壺月

咫尺

風葉

古井

晋如

剋して和スの道理にて酒

雲に伏高野の奥の遊び金

蛇こはかりの雪駄を鳴らす

此石はいつあたゝまる奉行杖

怒る拍子にふんどしは解ケ

定なき世にかまばこの上手あり

鼻帯ふくろ腹が又出来

影たのむ山ほとゝきす了誉講

一仲人は家とこそきけ

我恋の道行作り後シに付

浴衣の内は綱敷に似た

向ひよりぶち込犬の游よる

仏へ駄菓子猶哀なり

日坂の膝はわすれぬ無用の樹

沾洲

甘谷

陽風

月下上三ウ

蓮之

古井

晋如

風葉

月下

咫尺

壺月

陽風

甘谷

沾洲

盃のうらに吹矢とゞまる

夏野行をしかの角の柄廻り

内は各くりおもかけに立

返事迄仕課せながら丸木橋

去月は旅寐後の月欠け

子を持たぬ人は猶泣小夜碓

暇云こむ野ゝ宮の供

花紅葉大黒銀の二おもて

翁の伝受入鞠にあり

名

かい敷は汗拭ひ也山の札

分限て隙て煩ひもせず

爰か年夜市の道具今朝見れは

雪にむかつてとうからし味噌

十二疋妻もありける臘臍臍

古井

咫尺

風葉

晋如

沾洲

蓮之

月下

晋如

壺月

陽風
上四ウ

蓮之

月下

陽風

壺月

馴てつはいは四良兵衛掛そや
引いれの大匠も入られ月も入
七夕の夜に逢そめて倦

葬はほんと鳴るさへあなはかな
かるた流しに水門に立

比良の暮勢田ゆく靱目の葉

三種の神祇硯昏筆

惜けなき鉾の足もから葵

降んと欲す海の舌先

ウ

案内をまくしかけても鉦の声

こけると軒分別もなし

銭呼は名護屋も今に齒に当る

座頭の理屈みな聞に寄

簞もよみ課せぬ敷家内喜多留

咫 尺 甘 谷 古 井 蓮 之 風 葉 沾 洲 壺 月 下 晋 如 風 葉 蓮 之 甘 谷 月 下 咫 尺

又來春とめのこしか舞女子

三千の裏白連歌花の主

四方の出口青陽の音

辰十月十日 合歡堂衆吟

白妙は垢ならねとも桜花

貝その息の登るはつ虹

帰る鴈田も宮殿も直下にして

山行鈴に猶あさ寐増

題を得て字にあへらるゝ世は暑き

羅綾へしむは例の和らき

武具飾る是等も月の有仕かた

活鯉はねる毛見の休所

ウ

手は垂て足は天なる茅刈

沾 洲

壺 月

古 井 上五ウ

徳 純

沾 洲

沾 徳

又 魚

沾 石

徳 字

喬 谷

沾 化

松 巴

薫^{クユ}るはかりに岐阜の哥銘

挑灯も百つらなれる旅は神

よほと飲たか今に笑はす

麟鳳の坐もゆるさるゝ丸頭巾

白袴より梅さくり当

届いても捨言伝のとけなくに

石にたつ矢の布袋にも鍼

町の香の猿戸明れは紫蘇畠

油に月の雲母を小車

落着は粥と頼みて滝の爍

替ふろ敷の露むすふ霜

艸紙干ぬ竿のなかれも花の雲

春も音なき檀林の無事

二
我谷とうくひす覗く二斛釜

長水

沾山

仙里

李喬

常雪

雨橘

沾風

蓮之

沾葉

青峨上六ウ

執筆

叉魚

沾徳

長水

得手に帆はこれ順風の牛
御客ふる大工髪結太秦や
器量は問ふな西にある姫
深窓に塩気物なき炭匂ひ
魚嗅犬を机から追ふ

来る雨に留守頼まれて鼻鐻
聞番の手へわたる或説

文盲な屏風も此世隠れ家に
今に蒲団へかねたはこ盆

昏屋紙夜をおもたかるかはゆさは
水に脉竹顔て仕廻ス

夕飯に帰す碁相手佐野ゝ月

ぼたに成まで癪いちらす

ウ
雲井より筆屋へ下りる蘭も有

沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾 沾
石 洲 谷 雪 純 宇 喬 化 蓮 風 山 里 巴 葉

猿の鬢を借りるちやつひい

隣かす婦道尽せり膝頭

おやち遣ふて風吹は夜半

耳すますゑうく読も蚊やり舛

樽も底ぬけ仏法へずる

為事ナズの数に入れん燕一把

朝すがくし御座船の齒

羽化もせむ八千八浦見とろける

頭陀に沽券は春の幸便

煤かちの家に髪の具花盛

一人は竜と藪入の襟

鯛の齒のしはし怒れる二日月

寐ぬるに鴟は尻ツはらひ啼

三
腰窓に姿はかりの鵝頭花

雨橘

沾徳上七ウ

青峨

沾山

常雪

喬谷

叉魚

徳純

沾洲

沾石

徳宇

長水「

仙里

李喬